熊野の森から

怪しの熊野

其の三十 「石投げんじょ」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

古座の海には「石投げんじょ」が出たという。柳田國男が長崎県などの妖怪として紹介したことで全国的にも知られるようになった海の怪異である。漢字では「石投女」と書かれることが多いが、他にも「石渚女」や「磯渚女」の字が当てられることもある

江戸時代の絵師、佐脇嵩之（さわき・すうし）が『百怪図巻』で描いた濡女。鬼女の代表として今に伝わるが、孤独老人への差別だったのかも知れない。（パブリックドメイン）

「ジョ」は「（若い）女」ではなく「尉」つまり老婆の姿だとする説もある。

長崎の石投げんじょは「五月の梅雨どき、もやの深くかかっている夜に漁をしていると突然、大きな岩が崩れるような音が聞こえ、翌日以降の晴れ間にその場所に行ってみても、何ら異状はない」そうだ。古座の石投げんじょの話もだいたい同じで、その他の特徴では、沖を通る船に向かって石を投げつけるとか、たいそうな美女であったなどの話もある。広辞苑では漁夫の錯覚を妖怪視したものだとしているが、これ何ともつまらない話だ。ところで、梅雨が五月というのは旧暦のことなのか興味深い。

古座の海岸では、石投げんじょが出たというが、荒々しい岩の姿を女と見まちがえたという説もある。写真の中央には謎の光体が映り込んでいる。

石投げんじょは、これも九州に出たという磯女と同系の怪異で、上半身は人間の美女の姿で、全身が濡れていて、その髪は地面に触れるほど長く垂れ、下半身は龍や蛇のようだという。その姿は、ゲゲゲの鬼太郎にたびたび登場する「濡れ女」の姿と重なる。濡女は、海で亡くなった女が変化したもので、声が恐ろしく、人間を喰（く）らうともいわれる。石投げんじょが人を喰らうという話は聞かないが、海難につながることから、磯女や濡女と並んで恐ろしい海の妖怪だ。

熊野の妖怪を調べていて面白いと感じていることなのだが、熊野の妖怪は九州の妖怪と似ているものが意外に多い。石投女もその一つだが、例えば川と山を河童が行き来したりするのも熊野と九州の河童の特徴だ。これは、昆虫の研究者である友人から教わった話であるが、ある種のバッタのDNAを調べたところ、九州と紀伊半島のバッタは親子といっても良い近縁性があるが、四国や中国地方とは他人だと分析された。このバッタは材木に産卵する種だが、友人は「昔は頻繁な流通が九州と紀伊半島の間であって、木製の船板に産み付けられた卵がかえり、その子ども達のDNAにも影響した」との仮説を立てているが、まだ証明はできていない。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。